

1 自然神学から公共神学へ

1 環境論とキリスト教思想

- 環境・経済・政治 -

1 - 1 : 環境論と聖書解釈 - 創造論から終末論へ -

(1) 論争の舞台としての創造論

(2) 創造論から終末論へ

(3) 環境論にとっての聖書の意義

・環境論を神話的そして経済的政治的文脈で捉えること。

テキストの意味の諸次元：deep ecology / social ecology

・新しい文明のヴィジョンの提示

2 経済的政治的な問いとしての環境論

(1) キリスト教思想と環境論との積極的な結びつきとその条件

1. キリスト教思想(神学)の根本的な問い直し

キリスト教の問い直しはキリスト教の範囲を超えるか？

キリスト教とは何か？

2. 聖書解釈(聖書を新しいコンテキストで読解する)とは

聖書テキストの唯一の意味・解釈(意味と解釈の単一性)は、いかなるレベルで可能であり、またいかなるレベルで成立し得ないか。

芦名定道「キリスト教信仰と宗教言語」、『哲学研究』京都哲学会 第568号

1999年 pp.44-76

3. 従来(とくに日本の)環境論の問い直し 環境倫理は終わったか？

4. 岡本祐一郎 『異議あり！ 生命・環境倫理学』ナカニシヤ書店 2002年

「第6章 環境保護にはウラがある」

「環境保護を考える上で、一九八八年は決定的に重要な年だ。地球温暖化論が発表されたからではなく、環境問題に関して「認識論的転換」が起こったからだ。環境問題が政治問題だということが明確に認識されたのだ」「環境と政治は切り離して議論することができない。この点は、欧米ではいわば常識になっているが、日本ではあまり馴染みのない考え方だ」(237)

「「環境を守れ！」という大義名分をお題目のように繰り返すか、「自然との共生」などといったキレイ事で満足してしまう。とてもウブなのだ」(213)

「スローガン」「なんとなくエコロジー」「ポーズとしてのエコロジー」「アンチモダンなエコロジー」「イメージ戦略」

「八〇年代後半から九〇年代にかけて、環境問題は環境安全保障として、国際政治の中で展開されていく。「米ソ冷戦の終焉 地球環境問題の主題化」という形で」(239)

「七〇年代から続く「環境マフィア」の影響力」

「発展途上国から環境保護主義に対して、「環境帝国主義」という批判が提起される。先進諸国の環境主義は、発展途上国にとっては先進国の身勝手にしか見えないのだ」(242)

「環境倫理学の課題は、イデオロギーに無邪気に乗って「地球を守れ！」などとは言わないことだ。むしろ必要なのは、「イデオロギー批判」だろう。「地球の危機」とか「人類の滅亡」のスローガンに乗ってしまうのではなく、そのスローガンの政治社会的関係を理解すべきだろう。この不可欠な作業を抜きにして環境倫理学を展開することに、現在どんな意味があるだろうか。環境倫理学が「環境についての説教話」に終わらないためには、今何が必要なのだろうか」(245)

5. 薬師院仁志 『地球温暖化論への挑戦』八千代出版 2002年

「IPCC（気候変動に関する政府間パネル）」を御本尊のごとく持ち出したところで、少なくとも一般市民にとって、その予言に対する信頼は根拠無視の信仰の域をほとんど出していないということなのである」(v)、「一人一人が自分の頭でじっくり考える必要があるのではないか」(viii)

「彼の抱いた危惧の主要な源泉は、伝統的な意味での科学的論証ではなかった。その懸念の主源泉は、予言機械（＝コンピュータによる気象のシミュレーション）の予測値なのである」(17)、「シュナイダー氏を始めとする多くの温暖化論者たちは、伝統的な科学的説明より、コンピュータ・シミュレーションを上位に据えている。人類が、自らの頭で考え、自らの手で実験を繰り返したきた科学的思考の時代は、終わりつつある」(18)、「かの有名な、ハンセン氏の「99 %発言」」「逆に、ティモシー・ワース議員らのやり方は、どちらかと言えばマインド・コントロールの手法なのである」(21)、「温暖化を断定するには十分な科学的根拠が未だ不足しているというのが、多くの気象学者の見解なのだ。シュナイダー氏らの立場は、むしろそれを認めた上で、十分な科学的根拠を待っていたのでは対策が遅れてしまうということなのである」(22)、「つまるところ予言機械の予言なのだ。通常の自然科学観に立つならば、このような予言は、単なる仮説として取り扱われるべきであろう」(23)、「人間が考えなくとも、観察しなくとも、実験や実地検証をしなくとも、自然界の姿はコンピュータが自動的に啓示してくれるというわけである」(24)、「

「世界観の問題」」「未来は大筋で予言可能だという世界観であり、多数多様な諸要素の複雑な相互関係の連鎖でさえ、基本的には偶然の巡り合わせの余地はほとんどないというわけである」(36)、「地球温暖化を真摯に論じるのであれば、まず、何よりも、気候が偶然に左右されるのではなく、基本的に予測可能な現象であることを証明しておかなければならない。でなければ、全ての議論が砂上の楼閣だということになってしまいますのである」(37)、「多数派の温暖化論者の意見が正しいと言うのであれば、気候は偶発的に自動変動するという説を、明確な根拠をあげて否定しておく必要がある」「気候システム自体に内在する自然変動性」(38)、「気候の予測は、野球選手の成績予想よりも難しいかもし

れないことになる」(41)、「多数決による科学などありえない」(42)、「短期予報用に開発されたモデルでは何十年も先の予想などできないというのならともかく、逆に長期的な平均的気候なら予想できるというのでは、根拠に乏しいと言わざるをえない」(53)、「前後が逆なのだ。つまり、まず気候モデルによる予測がなされ、次いでこれを検証するために国際的な研究プログラムに参加し、その結果として予測の正しさが検証されたというのならともかく、論文発表の順序だけからすると、推測が発表される前に実地調査が発表されていたことになる」(56)、「わざわざ気候モデルを用いて御推測いただくまでもなく、すでに周知の事実だったのである」、「気候のように複雑かつ繊細で、しかも偶発性を備えた現象をモデルによって複製することなど、いくら技術が向上したところで、そもそも不可能だと指摘しているのである」(57)、「環境庁の指摘によると、「現在の地球温暖化の予想モデルはきわめて未熟な状態にある」らしい」(61)

「一九六〇年代後半から一九八〇年代初頭にかけて、多くの人々は、温暖化ではなく、地球が冷えていくことを心配していたのである」(69)、「一九九〇年代に入る頃には、これらの著作はすっかり忘れ去られてしまったかのようである」(71)、「寒冷化説と温暖化論は、まるで流行のサイクルのように、隆盛と衰退を交替してきた」(72)、「槌田敦氏は」「シュナイダー氏らのことを次のように批判している」「前者は原子力産業の御用学者グループであり、後者は石炭産業の御用学者グループである。両者ははじめから到達すべき結論が決まっており、決して科学的ではない」「それは、どちらのグループに研究費が余計に出るかを意味する」(96)、「温暖化問題と原子力推進との重なり」(101)、「政府レベルで見ても、日本やフランスは、温暖化対策と原発推進とをリンクさせている」(103)、「地球温暖化対策を盾に取るような形で原発推進を主張することは、非常に問題があると思われる」(107)

「日本あるいは世界の規模でみると、近年、異常気象が増加している様子はみられない」(119)、「逆から見れば、異常気象が起こらない時代というのは、極めて珍しい異常な時代だと言えよう」(121)、「もし、世界中の全ての国々において、現在の日本と同程度の防災措置が講じられるならば、異常気象として数えられ災害を激減させるに違いないのである」(129)、「一九世紀後半から地球温暖化がはじまり、今日までに〇・五度の気温上昇が見られるというのは、大方の温暖化論者の共通認識である」(147)、「一九世紀の半ばから後半あたりまでは、小氷河期とさえ呼ばれるほど寒冷な時代だったことを忘れてはならない」「その時代に比べて暖かくなったことが、それほど問題なのであろうか」(152)、「今が特に暖かいというよりも、最近までが寒かったのだ」(154)、「どうも二〇世紀の昇温傾向を人為的な活動に還元するのは困難のように思われる」(157)、「重要なことは、気象の専門家さえ、一〇〇年も前の全球平均気温が「何をどう処理」したら求められるかわからないと言っている点である」「気象学の場合、そもそもデータの信頼性に問題がある」(162)

「地球温暖化論者は、「一九七八年から現在までに」北極の氷が数%減少したことを強調している。しかし、たとえそのことが事実であるとしても、それは氷が非常に多かった時期と比べての話ではないだろうか。むしろ、氷の量が減らずに、一九六〇年代～七〇年代のままであるならば、その方がよほど由々しき事態であるようにさえ思われる」(176)、「南極の氷の量が一定に保たれるためには、降雪量の分だけ、毎年どこかで融解が生じていなければならないのである」(179)、「南極大陸では気温が一〇～一五度ぐらい上昇して

も、海拔が高く、表面の温度がたいへん低いので、そこの氷がとけだすとは考えにくい」(180)、「率直に言えば、氷床が融けそうな具体的兆候は何も見られないということだろう。IPCCでさえも、氷床の融解を差し迫った問題としては懸念しているわけではない」(181)、「海岸などにある施設を守る計画づくり」「対策費用は一一兆五千億円になるという」「この超特大巨額公共事業にお墨付きを与えているのが、他ならぬ地球温暖化論などである」(186)

「単なる擬似相関ではなく、一致の背後に何らかの因果関係があるとなると、海水温の変動は、まず第一義的に太陽活動の強弱に規定されることにもなる。ということは、もし海水温の大きな上昇が実際に起こったとしても、それは温室効果によるものではない可能性も高いということである」(195)、「温室効果ガスの増大に起因する直接的な影響は、夏季の猛暑ではなく、むしろ暖冬となって現れてくるはずなのである」(204)、「二〇世紀が「CO₂排出の世紀」であったとしても、その影響が顕著になるのは、一九五〇年代以降でなければおかしいのである。つまり、過去一〇〇年間における「気温上昇のうち大半が一九四〇年代までに達成され」たことが事実であれば、人為的活動の加速度的拡大が地球温暖化を招くという説と矛盾してしまう」(218)、「二酸化炭素「元凶」説を正当化することはできない」(241)、「二酸化炭素はすでに多量にあり、その吸収量もすでに飽和しているということであろう」(244)、「ここに少々二酸化炭素がつけ加わっても影響は少ないように見える」(246)、「アメリカ政府は」「二酸化炭素よりも代替フロン類の方をむしろ制限すべきだと主張した」(248)、「では、なぜこれほどまでに二酸化炭素ばかりが注目されるのであろうか」(249)、「コンピュータ・モデルの都合によって、全ての温室効果ガスが二酸化炭素に換算されていたというわけである」(250)、「市場主義国家に計りしれない富をもたらす「金の卵」となり得るのである」「二酸化炭素に注目が集まれば集まるほど、その商品価値は高まる」「排出枠取引市場の応援団」(254)、「二酸化炭素を出さないという理由で、原子力発電が正当化される」(258)、「温室効果自体は、あと約3%強程度しか高まる余地はなく、少なくとも無際限に働くようなものではないのである」(261)、「ましてや、ワットの蒸気機関が登場する以前から二酸化炭素濃度が上昇し始めているというのでは、全く辻褃が合わない」「産業革命? 化石燃料の大量消費? 二酸化炭素濃度の増大? 地球の温暖化という図式は、市巷で語られるほど自明な事実ではないのである」(276)、「寒暖の変化がまず先に起こり、それに連れて大気中の二酸化炭素濃度が変動するという順序が理解できよう」(286)、「気温が上がったので二酸化炭素が海に充分吸収されことなく大気中に残ったという考え方」(292)

「一般向けの地球温暖化論を紹介する書物では、多くの場合、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の報告が採用されている。簡単に言えば、国際的に権威を付与された期間の見解を示すことによって、人為的地球温暖化論の正統性の根拠としているのである」(307)、「その実態は、三〇〇〇人の科学者のコンセンサスとはほど遠く、ごく少数の科学者たちが「科学的な知見をふくらませる極端な結論」を導き出したに過ぎないと言われている。すなわち、IPCCは、ごく少数の中心的人物によって主導されているというわけである」、「気候マフィア」(311)、「IPCCの場合は科学を政治が利用した」(313)、「地球温暖化真理教」(314)、「IPCCブランドと、それを宣伝するマスコミによってお墨付きを与えられた」「その受け入れ方はいかにも軽い」(315)、「この静かな脅迫は、頭ごな

しの一方向的命令ではない」「この脅迫がもたらす、目立たぬが実は強力な作用こそ、「抑止」と呼ばれるものなのである」(320)、「地球温暖化問題は、われわれに対して、得体の知れない抑止力を発揮している」(325)、「抑止力管理の社会へと進みつつある」(331)。

6. 環境論の批判的な吟味の必要性

- ・科学のイデオロギー性 環境問題は単なる科学技術の問題ではない。経済的政治的な問いである。
- ・環境論の複合性、総論から各論へ
環境論のすべての事項が同じ程度に科学的なわけではない
- ・『岩波講座 地球環境学』(全10巻)岩波書店
『地球環境学3 大気環境の変化』1999年
 - 「5 機構予測の現状と将来」
「長期の気候の予測は、人類の夢」であったが、前節で述べたように「それが可能である」とする根拠はそれほど確かなわけではない」(229)
 - 「6 地球温暖化と経済」
 - 「7 地球温暖化問題の科学と政治」
 - 「8 現象解明と問題解決のはざまに - 新しい科学を模索する試み」
「IPCCは、基本的には政府機関の国際機関であり、単なる専門家のグループではない。そのため、執筆者には、専門家が多いけれども、その意思決定には、各国政府の承認が必要になる。そのために、手続きは非常に複雑なものになる」(315)
- ・批判的知としての「市民の科学」の必要性和キリスト教のコミットメントの可能性

(2) 環境論と政治・経済とのリンク キリスト教的な公共性論の構築

7. John B. Cobb, Jr., Christianity, Economics, and Ecology, in: Hessel/Ruether[2000]
キリスト教と自然科学という問いを、さらにキリスト教と社会科学という問いに結びつける必要性、公共性の問題へ
8. Larry Rasmussen, Global Eco-Justice: The Church's Mission in Urban Society, in: Hessel/Ruether[2000]
現代のグローバル化における環境論と教会の役割
9. キリスト教的な公共性論へ
環境論に関連して、いわゆるグローバル化という仕方で顕在化してきた国際政治の構造への批判的な分析が求められる。国民国家・主権国家の位置をめぐって。
グローバル化(政治・経済・情報、そして環境)とは何か、国家とは何か
 - ・世界宗教としてのキリスト教の意味 キリスト教にとって主権国家・民族とはいかなる意味を有しているのか

(3) John B. Cobb, Jr.: Christianity, Economics, and Ecology

1. 新しいコンセンサスと現状

状況(497/1,2)

- ・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス

- ・現実にはほとんど変化を生じていない。

強固に守られた習慣の作用、社会全体と、短期的な自己中心性を共有している
歴史・問題の根(497/3-499/1)

- ・科学技術への関与とその歴史的な後づけ：リン・ホワイト、デイヴィット・F・ノーブル
- ・ベネディクト修道会：実際の技術と手仕事一般を修道的敬虔さの核心的要素とする
技能・学芸

- ・イマゴ・デイ理解の変化：エリウゲナ

純粹に精神的 精神的なものとの身体的なものとの合体
身体的なものとの精神化、物質と超越的なものとの結合
有用な技術・機械的技術は人間の本来の資質に属する
これを陶冶することが救済への手段である

技術 / 経済 / エコロジー(499/2,3,4,5)

- ・科学技術は、経済とエコロジーを多様な仕方で関連づける
economy (oikos + nomos) / ecology (oikos + logos)
家の実践的な秩序付け 家の構造

しかし、これらはまったく独立的に発展してきたのであり、最近まで関係性はほとんど考えられてこなかった。現在はむしろしばしば対立的に見られる。

2. キリスト教の問題性と課題

キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか(499/6-501/1)

1. 科学技術は貧困を縮小する（必要なものを生産し雇用を創出する = 豊かにする）
これは経済学者の目標であり、キリスト教徒はその自然な支持基盤となる
2. キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性
物質的な必要を満たすという目標の共有
3. 人口増加・人口爆発
伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視
医学の進歩、人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている

以上の理由から、キリスト教徒は、地球・大地の継続的な悪化をもたらす政策を支持することになるのである。しかし、これはキリスト教徒はこの状況に満足していることを意味しない。

自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること(501/2-503/1)

1. 科学技術のあり方の転換

これまでの科学技術は、労働力が少なく、資源と汚染処理スペースが豊富であった時代のものであるが、現在状況は反対になった。生産性とは労働生産性を最大化するのではなく、資源生産性を最大化することを目指すべきである。より少ない資源によって十分に有用な商品を生産すること。この点で、現在の科学技術には多くの改良の余地があり、キリスト教徒はこのシフトに躊躇なく賛成できる。

2.個々の建物や都市全体を少ないエネルギーと資源によって建設すること

3.資源の再利用・リサイクル

4.食物などの農産物の持続可能な形式の発展、一年生穀物を多年生穀物に代える

5.食生活習慣の変化による土地利用への影響

土地の適した利用（食肉用動物のための牧草地、穀物生産 人間が直接消費する）

現実には、多くの牧草地が穀物（家畜用）へ転換されつつある。食肉は、牧草で飼育された動物に制限するという変化。

6.古代キリスト教の徳の復興

他者（地球に共に生きる生きた被造物すべて）の幸福のために自分を犠牲にする

消費者志向社会からの撤退

すでに富裕である者は収入や財産の増加を進んで際し控えること。

収入と富の再分配についての公共政策の支持。

3. 政策レベルの問題とキリスト教

税政策の転換(503/2-504/2)

1.逆進的な税や給与税から資源税・汚染税へ

資源税：貴重な資源の使用に税を課す、良性のエネルギー資源の競争力を高める

汚染税：汚染処理の社会的コスト

この結果、通常のエネルギー資源を少ししか使用しない住宅や都市の建築、修理とリサイクルが、好ましい選択となる。

こうした動きに対する異論：貧しい者はエネルギーや資源を買う余裕がない。

しかし、この税制の転換によって、一般に貧しい者の負担は軽くなる。所得税の元来の意図は、富の再分配であり、税の再分配的使用は可能である。

2.建築や改築を無税に土地にのみ税を課す、土地投機を抑制し、有効利用を促進する

土地の利益は共同体全体に属している（ヘンリー・ジョージ）

税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）(504/3,4)

急激な人口増加が続く国々では、女性の地位の向上がもっとも重要

人類は持続可能な使用の限界をすでに超えてしまった。人口増加（総人口）と一人あたりの消費の不必要な増加とを、抑制しなければならない。

4. 経済成長とキリスト教

キリスト教徒は支配的な経済的実践と理論とを批判しなければならない(504/5)

経済成長至上主義を断念すること。儉約を支持するキリスト教的価値の内面化。

成長自体とそれを達成する政策との区別(504/6-506/2)

経済的成長自体はエコロジーの敵ではない

放棄できない特定の目標と一般化された経済成長（破壊的）との区別

キリスト教の目標はすべての人々が良き（快適・健全な）生活のための物質的手段を持つこと

人口増加 大量の生産 総体的経済成長の必要
最も劣悪な貧困の形態における増加を伴う
成長志向的な政策と権威主義的な強制によらない貧困の克服の例(506/3,4,5,6)
インドのケララ州の場合：女性による女性の教育
成長をすべての人々は共有し、環境への過度の付加を伴わないという仕方での
成長の可能性、モデル的な価値

5. キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係

キリスト教共同体内での必要性(506/7-507/3)

地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること

神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

元来の意味に従って、経済とエコロジーとの連関を見直すこと(507/4-508/6)

家全体（人間とその他者）の研究、この家を秩序づける規則、

現実の経済活動がこの規則に合致すること。エコロジーの基盤に立って、経済理論を再考すること（現代経済学の成果の放棄ではなく）、これには前提におけるいくつかの深い転換が要求される

1. 経済的人間を共同体における人格として再考すること

共同体自体に起こっていることを真の経済発展の尺度とする。生産と消費の増大が共同体を崩壊させるとき、それは経済的に肯定できるものではない

2. 経済的人間をその部分とする共同体は人間に限定できない

他の被造物と孤立しては繁栄できない、他の被造物の状態の改善は経済的利益である

3. 共同体は未来へと広がっている

続く諸世代の幸福と他の種の未来の幸福は無視できない

4. 共同体のメンバー（人間も非人間も）は他者に対する価値とそれ固有の価値とを持つ

5. 被造物の多様性は人間にとって重要な美的価値を増し加える

種の絶滅を避け、文化的多様性を保持する。

6. 科学技術をエコロジカルな仕方です適切なものとする

人間の必要を満たすことの犠牲を最小化する技術の使用

7. 神はすべての被造物に配慮している

苦痛を軽減し楽しみを豊かにするために働くことの重要性

6. グローバル化における経済と政治(508/7-510/1)

グローバルな経済についての議論の必要性(508/7)

- ・ 地域経済の強調：必要なものの多くをその地域で生産すること、交易することの自由と交易しないこと

- ・ 経済的な自律性は有意味な政治的自律性を可能にする (509/2)
 しかし、地域の政治的自律性は絶対ではない、水利用の問題
- ・ 共同体の共同体を構成すること (広域的な共同体) (509/3)
- ・ 国際連合 (509/4) : 機能強化の必要性
- ・ 現在、政治的秩序には経済的秩序に対して奉仕することが期待されている (509/5)
 多国籍企業や国際機関 (IMF, WHO, 世界銀行) への権力の委譲
 地球の運命は、株主に仕え総体的な経済成長を促進する意図を持った機関 (地球を救うことはその基本的使命に属さない) の手に握られている。
- ・ 経済関係の国際機関を強化された国連に従属させること (509/6)
 方向を変えるとということの一つの目標は、経済的秩序を政治的秩序のコントロールに引き戻すこと。普通の人間がそこで生きる規則の形成に参加することを可能にする。

7. キリスト教 - 失敗と課題 - (510/2,3)

「われわれ西洋のキリスト教徒」 (510/2)

信仰は愛の純粋に個人主義的な表現を越えて社会分析、社会倫理へと進むことを要求する。しかし、失望がある。環境危機への責任は主張されたが、ほとんど手つかずである。

新しいヴィジョンを求めて (510/3)

われわれの失敗は、キリスト教信仰本来のものから帰結ではない。それは、むしろ、過去2世紀を特徴づけてきた思惟の分裂の進行を我々が受け容れてきたことの帰結である。いわゆる「専門家」を恐れすぎ彼らの前提を吟味するのに控えめすぎた。一切のものは相互に関連し合っており、エコロジーと経済学との区分を突破する機会と責任がある。

この惑星における人間の存在の仕方 (持続可能なだけでなく、再生的な) へと社会全体を向かわせ得る新しいヴィジョンを提供するように求められている。

(4) Larry Rasmussen, *Global Eco-Justice: The Church's Mission in Urban Society*

1. Centennial Spirits (515-518)

Walter Rauschenbush, *Christianity and the Social Crisis*, 1907

・ 百年期の精霊たちというセッティング

19世紀あるいは20世紀とはいかなる時代だったのかという問題

光と影の両義性：栄光の世紀 (繁栄と自由) そして破滅の世紀

・ 社会的問題、近代の社会問題：資本主義と労働者、急速に発展する近代産業社会の問題
 世界市場

 トレルチ (『社会教説』)、マルクス (プロレタリア革命の予言はずれたが、資本主義による社会の原子化と人間の搾取と疎外という予言はあたった)

・ 20世紀は19世紀以上に状況は極端化し、かつグローバル化した。貧富の格差、暴力

2. Something Old, Something New (519)

・ 20世紀の問題状況には、ラウシェンブッシュの証言がすべてではない、新しい次元が

ある。

- 1 9世紀の西欧の進歩的な聖職者と社会理論家：一群の相互に関連し合った諸問題
資本主義的秩序への批判
- 2 0世紀：社会問題のグローバル化と都市化（人口移動）
環境問題との結合（2 0世紀の最後の数十年、近代の産業化社会の破壊
的效果）
社会問題は本質的に社会正義の問題である、環境問題は持続可能性の問題
である グローバルな環境・正義問題（global eco-justice）

3 . Globalization (520-524)

- ・ グローバルな環境・正義は教会の都市伝道のための適切な枠組みである
グローバル化の連続した三つの波から生じたエコロジカルな帰結を論じる。
- ・ 第一の波(521)
征服（植民地化）、交易、キリスト教（「文明の普及」としてヨーロッパの担い手
によって自己同一化された宣教信仰）
これまでキリスト教の都市宣教は、グローバル化が社会共同体的かつ生物物理学
的かつ地球惑星的なものであることに留意せず、もっぱら社会共同体的な領域にの
み関心を払ってきた（人間中心主義）
- ・ 第二の波(521-522)
発展（第一の波は継続）
発展：かつては、内的な進化、自己組織化としての進化を意味した。しかし、今
や、資本主義的民主主義の生活の仕方（近代の経済進歩に規定され科学と技術を
進展させた）を意味するようになった。
文明の度合い・序列化、発展した文化と発展途上の（未発展な）文化との二分法
- ・ 第三の波(522-523)
冷戦以降の自由貿易の自由化（第一と第二の波も継続）
国民国家から世界市場を支配するグローバルな経済勢力へ。市場は単なる経済交換
の場ではなく、社会自体のモデル・論理となる。一切の関係性を規定する。
自然は資本によって植民地化され、生命の諸形態は工学で利用されるための有機
プラスチックとなり、自然に対する権利としての特許は自然の持つ権利を凌駕して
追求される。生命の多様性は、いたるところで、攻撃されている（生物資源調査、
生命技術、グローバルな単一文化の普及、大量生産と消費、生物の生息領域の侵害）
第三世界の農業は巨大な農業ビジネス企業の活動範囲に取り込まれている。
情報と知識自体が商品化しつつある（知的庶民階級という一種の閉鎖領域におい
て）。知的所有物は公共の権利ではなく私的な権利となった。グローバルな自由貿
易資本主義の自然、知識、文化への垂直的な浸透とその強化され拡張された水平的
な進展との合致。
- ・ グローバル化をどうとらえるか(523-524)
産業革命以来の大転換というだけでは、その深い含意は明らかではない。
諸問題の重大な連関（相互の影響し合うグローバルな政治動向の複合的な結果、自

然と社会が総体として未曾有の変革を受けていることの部分)を捉え表現することに、企業、選ばれた公務員、教育者、メディア、信仰共同体も失敗している。

4 . A Proposed Framework (524-526)

- ・社会正義と持続可能性とに本気で取り組むために

枠組みを転換すること：キリスト教自体を歴史の次の時代に対する積極的な力として考察する枠組みへ

進むべき道は、これまでのグローバル化の強力な諸勢力を前提とした「持続可能な発展」ではない。進むべき道は、「持続可能な共同体」である。経済と環境を健康な地域的また地方的な共同体のまわりに包むこと。物質的に健康な共同体という経済目標。このためには、経済的そして政治的な権力のかなりの縮小が必要である。すべての生命の尊重と生命共同体全体を含む責任の領域。

「コスモポリタンの地域主義」：地域共同体を守ると同時に、経済的なグローバル化の支配をチェックするための広域の連合体への参与。

5 . Closing (526-527)

- ・持続可能な共同体のために何が役に立つのか、教会はどんな役割を果たすのか。
- ・教会（神学、典礼、宣教）において、生きた共同体としての地球が失われているという問題状況
- ・長期と緊急の課題

緊急課題：グローバル経済の衝撃が都市住民において持つ悪しき効果へ対処し、持続可能な共同体に向けて高まる変化を見出すように試みること。

長期の課題：キリスト教が地球へと回心すること、都市環境において、又ミノーゼ的な諸力（人間の命自体を創造し支え、そして消滅される）からの集団的疎外を克服すること。生きた地球との交互関係を新しい形態において回復すること。すべての生命形態が経験する形態（生命と呼ばれる驚異と神秘において、それ自身の不可欠の作用を有する）であるという感覚。

都市のヴィジョン（黙示録 21:22-22:5）

実践的な日常的神秘主義 cf. ハシディズム

- ・グローバル化の波の終局において地球へと回心することは、短期と長期の双方において教会の環境 - 正義的な都市宣教なのである。

(5) 文献補足

Bill McKibben, *Hope, Human and Wild. True stories of living lightly on the earth,*

Ruminator Gooks 1995

Chapter Three: Kerala (pp.117-169)

Kristin Shrader-Frechette, *Environmental Justice. Creating Equality, Reclaiming Democracy,*

Oxford University Press 2002

Mary C. Gray, *Sacred Longings: Ecofeminist Theology and Globalization,* SCM Press 2003

Heather Eaton, *Introducing Ecofeminist Theologies,* T & T Clark 2005